



教育観の 解体×再構築

教育観の解体

自国の教育文化以外に触れることを通して、私自身が、所属する学校や教育委員会が、あるいは日本として行っている教育行政が推進してきている教育システムを相対化する機会となった。例えば私の主たる問題関心であった多文化共生社会の実現に向けた現状と課題の分析という枠組みについて、多様な宗教やルーツを持つ人々との共生はタイ社会で日常のことなのである。学校で教育するものというよりも、生活することで身に付けていく習慣に近いのであろう。私はこれまで多文化共生社会の実現に向けたプロセスを学校教育の枠組みで捉えていたが、この固定概念を解体する必要性に駆られたのである。異なる教育文化の観察を通して自身を相対化することの意義を改めて感じさせられた。

教育観の再構築

教育は、学校や教員のみが行うべきという価値観にとらわれず、地域や社会と協働しながら行うことによってさらなる効果が期待できると思い至った。生徒を対象とした学習内容を習得する成果についてのみ論じるならば、この考えは適当ではないかもしれない。しかし、教育するのは、あるいは教育をされるのは誰なのだろうか。タイのノンフォーマル教育では、学齢期にこだわらずに教育を受ける機会が提供されていた。学校という場が、地域社会に開かれる可能性を目の当たりにしたのである。つまり、学校生徒の学習のみならず、教育を求める人全ての学習を促しうるのである。個人の成長が、個人の成果に留まるのではなく、社会全体の成長につながるという理念は、私の教育観を再構築することにつながっている。

本プログラムの経験による成果

SDGsの4番目「質の高い教育をみんなに」が指す、質とは何か、教育とは何か、そしてみんなとは誰か。これを狭義な認識から広義な認識へ拡張することとなった。こうした認識の変容を私が所属する仲間たちやこれから出会う仲間たちとも吟味し、共有し、実践していきたい。個人ではなく、こうした変化を受容し、新たな価値を創出していける素地を持つ集団が、未来の社会を明るくしていくのだと信じている。



多文化共生社会の実現に向けて

タイから学んだことを踏まえ、3つの視座から多文化共生社会の実現に向けたアクションプランを提起したい。

私に取り組むこと

1. 担当する生徒たちに、このプログラムの知見を取り入れた授業を行う

⇒世界史探究の授業ではタイを事例とした探究学習、地理総合の授業ではタイの地域文化をテーマとした調べ学習を通して、宗教的多様性に気付くことを目指す。

2. 担当する生徒たちが、タイを含む他国の人々と対話する機会を創出する

⇒直接コミュニケーションを取ることで、心理的障壁を取り払うことを目指す。

3. 所属する組織の仲間たちと、このプログラムの知見を共有、吟味し、実現可能性について議論する

⇒インクルーシブ教育の可能性を模索したい。

私と地域で取り組むこと

1. タイ語講座を有する大学等と連携し、タイ語または英語を用いて日本文化をタイの学生に伝える機会を創出する

2. 私が所属する学校から希望者を募り、1の取り組みを協働的に進める機会を創出する

3. 1の機会を地域社会に公開、あるいはその成果を地域社会に公表することで、国境を越えた交流が身近にできることを実証する

4. 1～3を中長期的に継続し、高校・大学・地域が一体となって異文化と触れあう環境を確立させる

学校文化が対峙すること

1. 宗教的多様性、性的多様性を生徒が学び、考察する機会をいかに拡充するか、学校レベルで議論する

⇒いずれも不可避でありながら、未だに十分な受容と実践がなされていない。一足飛びに進めず、共通理解を醸成する機会が大切と考える。その参照軸として、タイの経験が有効となる。

2. インクルーシブな学校文化を醸成することにつながる学校行事の検討を行う

⇒障害の有無や文化的背景に関わらず、すべての生徒が平等に学び成長できる環境を構築するためにも、教員の理解を深める機会が求められる。タイの個別支援計画（IEP）の事例は一つのモデルとなりうる。